In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	ストアの認識論
Author	鹿野, 治助
Citation	人文研究. 9 巻 9 号, p.1020-1033.
Issue Date	1958
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

ストアの認識論

鹿野治助

ストアの認識論が名目論であることは既にプロシャールによって指摘され、ストアの存在が多元論的であることはブレイエによって、なおまたストアが感覚主義であることはポーレンツやその他の学者によって指摘された。この小篇はこれらの説に対して何も異を主張するものではない。私としてはストアをノミナリズムというのは認識論からの考えであって、形而上学からはまた少しく趣きを異にするのではないか、また多元論の一面にモニズム、寧ろ多元にして、単元、そして倫理学からは個と一般とが一致するのではないかと思うのであるけれども、この小篇に於いてもはもっぱらストアの認識論を自分なりに把握しておこうと思うだけである。

一

ストア哲学が唯物論であることは周知の通りである。これは時代の要求からしても当然であったように思われる。プラトーン・アリストテレースの二大高峯の故に、今日からはアリステレース後の諸哲学は影薄くして、殆んど取るに足らず、精々前時代の命脈を伝えているかに受取られている。しかし当時としては時代は既に移ってプラトーン・アリストテレースではもう、古かった。そして新興の或ものは新哲学として当時の人々を惹きつけただけでなく、その後も長く世を支配したのである。新らしい傾向の一二をあげれば、アレクサンドロス大王の遠征前のギリシアは割拠的内向的であったに対して、遠征後は遠心的外向的になり、全世界を一つとするか、少くともポリスの壁を取り去るような傾向になったことは疑えない。次に唯物論になったことも注意されねばならない。国亡びてその日の生活にさえ事欠く時代に於いては、プラ

トンのイデア論の如きは理窟はとにかくとして、手取り早く役に立たなかった。実際に於いて存在するものは、直接われわれに働きを及ぼすもの、もしくは働きを受けるものでなければならない。例えば画餅の如きものではなくして、われわれの飢を充たし、渇を医するものでなければならぬ。わが身を入れる土地、休息させるに足る家でなければならない。完全なる家自体よりも雨露を凌ぐに足る粗末な小屋、もしく桶の方が遙かに値打があり、また実在性に富むと考えたことでもあろう。ストアに於いては存在は手でつかめるものでなければならなかった。古いものを宗教の如く尊崇するアカデミー派や逍遙学派は別として、エピクーロス派の如きも矢張唯物論的であった。

唯物論をとるに至った理由は色々あるであろうが、兎に角ストアは唯物論をとった。彼らによれば一切存在は物体である。神であろうが精神的なものであろうが、あらゆる存在[1]は皆物体で、そういう個々の多なる物体のみが存在だというのである。ストアがアンティステネースの系統を継ぐと考えられるならば、名目論となり個々のものだけを存在と考えるのは全く自然であるといわねばならぬ。尤もダッドレイの如きはアンティステネースを犬儒とする従来のディオゲネース・ラーエルティオスの所伝に反対し、アンティステネースと犬儒との生き方の非常な違いから、犬儒はディオゲネースに始まると主張している。[2]しかし思想的にアンティステネースのノミナリズムがゼーノーンに伝わらなかったとは断じ難い。[3]とにかくストアでは個々の具体的な物体が存在と考えられてることは疑えない。しかし存在そのものを扱うのは自然学であるから今は触れない。

二

個々の事物が感覚を通してわれわれの心に印せられる時、「心像（パンタシア）」が生ずる。ゼーノーンはこの心像を「心内の痕跡」（typōsis en psychē）といっている。つまり心像とは印を捺したように心内に出来た像というわけである。しかし単に心像だけでは事物の認識にはならない。その心像は知性の働きによってよしとして認められるか、さし控えられるか、或は退けられるかでなければならない。この能力は承認とでも訳すべきシュンカタテシスであるが、この知性に認められて始

めて心像は「認識」（katalēpsis）の中に取入れられ、もしくはわれわれに働くものとなるのである。ところでよしとして認められたものは真なる心像であり、うけがわれずして退けられたものは偽なる心像である。前者は「カタレープシス的心像」（phantasia katalēptikē）で、後者は「カタレープシス的でない心像」（phantasia akatalēptikē）である。つまり前者は把握された心像であり、客観に即してあるが通りにつかまれた心像である。katalēpsis とか kataleptikē いう語は kata-lambano という語から来たのであって、どこ迄も「即して取り」「その通りにつかむというのである。従ってないものの心像ではなく、「存在するものからの心像」、しかも「存在するものそのものの通りに印せられ、存在しないものから生じないような風に印せられた心像」である。それはわれわれによってよしとしてうけがわれた心像でなければならない。syn-kata-thesis なる語も矢張 kata なる語を伴っている。従って単なるシュンテシスではなくして、存在に即してあるがまま、主観も一緒になって定立するのである。ゼーノーンは指を伸した右の平手を示して」このようなのが心像だ」といい、それから少しく指を曲げて「このようなのが承認」、今度は全部握りしめて「これが認識」といい、最後にそこへ左手を持って行って、固く握りしめ、「かくの如きが知識だ」といった。④

ところで心像についてであるが、「心内の痕跡」というゼーノーンの言葉に関して、クレアンテースとクリューシッポスとでは解釈が同じでなかった。クレアンテースは言葉通りにとって丁度蠟に印を捺すように刻印が出来るものと考えたが、⑤クリューシッポスによると、もしそのようなものであれば、同時に同じ場所に沢山受取ることは出来なくなる。⑥例えば三角形や四角形の如き違ったものを受取ることは困難になる。また蠟が型を受取るように心に刻印を受けるのならば、最後のものは前のものでぼやけることになるであろうし、また最初のものは記憶が薄らぐことにならねばならない。クリューシッポスはこのような理由でクレアンテースの解釈に反対し、心内の痕跡を「心内の変化」（alloiōsis en psychē）或は「心の変質」（heteroiōsis psychēs）であると考えた。つまり沢山の心像を持つならば、同じ心が同時に沢山の変化を受けるわけで、丁度空気が同時に沢山の人から声を出されるならば、同時に種々の音を受けて変化するように、心も受ける沢山

の像に応じて変化するというのである。⑦ここにわれわれは心がプネウマであり、その活動がその緊張関係であることを思うべきであろう。クレアンテースでは全く受動的で蠟で捺された型の如く固いが、クリューシッポスの解釈では若干の能動性が認められる。しかし彼の用いた空気のたとえは蠟のそれよりは弾力性あるとしても、矢張同じような困難を伴う。けだし物質的なものにおいて矛盾であり不可能なものが何ら矛盾なく、また可能であるのが霊的なものや精神的なものの特色であるのに、寧ろ物質的なもの、物体的なものを以って説明しようとするからである。精神的なものは精神的な場所に於いて考えられねばならないのに、却って物質的な場所に於いて説明しようとするからで、それは唯物論としての制限なのかも知れない。しかしクリューシッポスが痕跡において心の能動面を注目したことは確かに功績であるといわねばならぬ。しかしそれも余り強調されてはならぬ。クリューシッポスは「心内の変化」といいながら「心内に生じた受様」(pathos en tē psychē)⑧ともいって、その受動面を忘れなかった。

心像は感覚器官を通して心に印せられる。例えば眼を通して白いものが見られた時、心内に生じたものがパトスである。ところでこのパトスに対して、われわれを刺戟したものとして外界に対象がなければならぬ。それは他の感覚の場合でも同様である。ストアはパンタシアとパンタストンとパンタスティコンとパンタスマとを区別した。パンタシアというのは心内のパトスで、今の例でいえば心内の白いものの如きである。それに対して心像の先方にある対象がパンタストンであって、ブレイエはこれを la réalité représentée といっている。⑨第三のパンタスティコンというのは例えば影と戦うとか、空しく手を出すといったような場合の如く、パンタストンに基づかない心内のパトスである。最後のパンタスマとはパンタシアと同じ意味に用いられる場合もあるが、⑩大体は空しきものでありながら人を惹きつけるパンタスティコンであり、⑪メランコリーな人や気違などに起るものに用いられる。⑫クリューシッポスはエウリピデースのオレステースをその例にあげている。

お母さん、お願いです、私に復讐しないで下さい。

血がぎらぎら輝き、髪の毛が蛇のようにどくろ巻いています。

彼らは近づいて私にとびかかろうとしています。

オレステースは狂気のようにこう叫ぶ。しかし実際は何も見えない。だから姉のエーレクトラは

不幸な者よ、お前はベットに休むがいい、

何も見えやしない、お前の見てるものは何でもないのだ。[13]

というのである。

心像にはパンタスティコンやパンタスマの如く外界に実物のないものもはいる。いま心像の種類をあげると、或ものは感覚的であり、或ものは感覚的でない。前者は一つの感管、もしくは一つ以上の感官を通して得られるものであり、後者はディアノイアを通して得られた非感覚的なものである。感覚的なもののうち或ものは存在するものから来たもので、しかもあるがままのものである。[14] だが或ものは存在するものから来たかの如く見えるが、単に見かけだけのものである。また心像のうち或ものは理性的なものであり、或ものはそうでない、前者は理性的動物の心像であり、後者は非理性的な動物の心像である。理性的な心像は思想といわれるが、非理性的な心像にはこれといって特別の名前はない。更にまた心像の或ものは「尤らしいもの」であり、或ものは尤らしくないもの、或ものは尤らしくまたらしくないもの、或ものは尤らしいものでもらしくないものでもない。第一の心像はわれわれのスムースにうなずけるもので、「今は昼である」とか、「私は話している」の如きものである。第二の尤らしくない心像とは、われわれの承認を得られない心像で、例えば「もし昼ならば太陽は地の上空にない」の如きであり、第三の尤らしくまたらしくない心像とはその時々で違う場合のもので、例えば迷っている人がああいったり、こういったりする場合の心像の如きである。第四の尤もらしいものでもらしくないものでもない心像とは、星は奇数であるとか偶像であるとかいうような心像である。また尤らしい心像のうち或るものは真であり、或ものは偽であるし、また或ものはその何れでもあり、或ものは何れでもない。陳述が真である場合は真であ

る。例えば実際昼である場合、「昼である」のは真である。陳述が偽である場合にはその心像は偽である。またオレステースがエーレクトラによって気違いになったというのは真でもあり、偽でもある。また類的な心像は真でもなければ偽でもない。なぜかというに種的なものはああであるか、こうであるが、これらのものの類はああでもこうでもないからである。[15]例えば人間の中の或ものはギリシア人であり、或ものは蛮族である。しかし人類はギリシア人でもなければ蛮族でもない。心像の中で真なるそして鮮明な心像をカタレープシス的心像といっている。これらの心像に承認を与えるものがカタレープシスだからである。それはさきに述べた存在するものから在る通りに印せられた心像である。だが偽であるパンタシアや真でもはっきりしないパンタシアはカタレープシス的でないパンタシアといわれる。[16]例えば発熱してる人やメランコリーな人は、心像を持ってることは持ってるが、それはカタレープシス的な心像ではない。それは「外部から偶然に」あるのであるから、それについては自信あるものとして繰返し主張することも出来ないし、[18]またそれに承認を与えることも出来ない。[17]また或心像は例えば夢や神話、鳥、犠牲による啓示や神から送られた心像である。

三

われわれの認識の成立には、感覚と知性とがなければならぬ。個々の事物の心像が与えられるのは感覚を通してであり、それを把握し、承認を与えるのは知性によってでなければならぬ。また上の二者はそれぞれ心像の出所でもある。黒白粗滑は感覚に基づくし、善悪美醜は知性に基づくからである。

ディオゲネース・ラーエルティオス[19]によるとストアは「感覚」なる言葉を次の四つのものに用いている。㈠ヘーゲモニコンから感覚〔器官〕に及んでいるプネウマ、㈡感覚によるカタレープシス、㈢感覚器官の周辺の機構、㈣感覚器官の活動の四つである。ところで第一のものはプネウマで、それはわれわれの心から感覚器官に拡っている霊気であるが、しかしそれは具体的には第三の感覚器官の機構と結んでいるのでなければならぬ。感覚器官は外的なものであって、それだけでは感覚は生じない。従って第一のプネウマと第三の器官の機構とは相結んでいるのであって、それを便宜上分けて考え

たに過ぎない。また第四の感覚器官の活動というのは第一と第三の結合しているものの活動である。第二のカタレープシスは今いった活動の結果である。総じていえば心が感覚器官を通じて、プネウマにより感覚なる認識を行うのだといえるであろう。感覚は厳密には今いったような一種の認識でなければならない。「総ての感覚は承認であり、認識である」[20]とか「感覚は自身承認である」[21]といわれる所以である。しかし感覚といっても今四つ示されたように広い意味狭い意味色々の別があるわけで、第三の感覚器官の活動という如く未だ認識にならぬものもある。そして寧ろ感覚には受動の面が強いから、普通は認識の一歩手前のものと見るべきであろう。

ところで感覚的パンタシアは如何にして生ずるであろうか。感覚的パンタシアが生ずるためには五つのものがなくてはならない。感覚されるもの、感覚器官、場所、関係（ポース）、ディアノイアの五つである。[22] これらのうち何れが欠けても感覚的認識は成立することが出来ないし、またそれらが正しくなければ、正しいパンタシアは生ずることが出来ない。このうち最初のものは感覚の対象であり、存在するものであって、第二のものは感官である。第三の場所は感覚されるものの「於いてある場所」のことである。第四のポースは関係であって、感覚されるもの、即ち外物は感覚するものに対して或関係が必要である。例えば一定の距離とか一定の方向とかいうような関係になければ、正当に感覚されることは出来ないであろう。これは場所の中に入れてもいいのではないかとも考えられるが、場所に盛り切れぬ独立のものがある。第五のものは知性であるが、それは普通の健全な知性のことで、病人や狂人の狂える正常ならぬ知性ではない。もしそうでなければ、パンタスマやパンタスティコンは現れても、正常な感覚的心像とはならないからである。

次に感覚についての真偽問題であるが、感覚には広狭の別が考えられるから色々いえるわけである。つまり感覚の或ものは真であり、或ものは偽であるともいえるし、或は感覚には真偽はないともいえれば、或は感覚は皆真であるともいえる。感覚のプリミティブな状態に於いては、真偽以前とも真偽はないともいえるし、また素朴な意味に於いては皆真であるともいうことが出来る。例えば水中の櫂はこわれて見え、また鳩の首はその都度違った色に見える。これは事実であ

る。その意味では何れも真である。しかしその故にそう判断すれば誤謬となる。水中から櫂を取り出して見ればこわれていないからである。しかも水中に於いてこわれたように見えるのは水が感覚の正しい活動を妨げ、鳩の場合には、角度によって光が感覚の正当な活動を邪魔するからである。[23] そういう意味で感覚には真偽はないのであって、それが知性の立場、所謂普通の認識的な立場に立った時、始めて真偽が現われるのである。従って感覚そのものの立場では賢者愚者の別はなく、知性の上で始めて生ずるのである。しかも実際に於いて感覚の立場にとどまっているということは稀である。では如何なる時真、もしくは偽かといえば、対象をあるがままに映しているか否かにあるので、それはさきに述べた感覚的心像が生ずるための諸条件が充されているかどうかにあるといえるであろう。

認識が成立つためには感覚は知性の協力を得なければならぬ。それでその知性であるが、ストアではプシュケー、ヘーゲモニコン、ディアノイアは区別されずに用いられることもあるが、厳密には区別すべきである。プシュケーは魂であり、心であって、生物の普く持ってるもので一番広い意味のものである。これに対してヘーゲモニコンは「指導的なもの」とか「支配的なもの」とかいうので、プシュケーの中の指導的な部分である。それはストアが認めた魂の八つの能力の中の最高の部分で、或時はディアノイアと同一の意味でもある。[24] それは理性的なもので、倫理的なものに於いては良心とか意志の意味でさえある。しかしディアノイアに比較する時は未だ意味が広く、魂の中の指導的な部分として動物に於いてさえ用いられる。だがディアノイアとなると、それは人間にのみある能力で、ヘーゲモニコンの中の更に上位的な部分ということになる。それは知性であっても狭義のものではなく、意志も感情も含まれているような能力である。なぜかといえば善悪正邪を弁別し、決断する能力だからである。

ディアノイアの働きは感覚と違って能働的である。それは外からパンタシアを与えられなくとも、自ら産むことが出来る。しかし感覚的認識に協力する場合には、与えられた心像について働くわけである。つまり感覚に基づく心像について、もしそれが存在から来て、存在に即したものであればそれをよしとして認め、そうでなければ承認を与えない。ストアは

われわれの「心の指導的な部分」(to hēgemonikon meros tēs psychēs) を非常によく出来ている「紙片」(chartēs) のようなもので、各観念は一つ一つそれに書き込まれるとなした。[25] 例えば何か白いものが感覚された時、それを取去れば記憶として残るわけである。同様にして沢山の記憶が生じた時、われわれは経験したと称する。ところで観念もしくは心像の入口については二つある。一つは何ら人工を加えずに自然に生ずるというのであり、他は教えるとか配慮することによって生ずるというのである。[26] 後のエピクテートスも自然的と後得的とを対立させている。前者によるものは特にプロレープシスといわれる。先取観念とでも訳さるべきであろう。これはディアノイアからして自然的に生ずるもので、「自然的な一般観念」ともいわれる。[27] 生得的なものではあるがしかしその故に生れると同時にあるというのではなく、縦い種子的ロゴスとして持っていても、現わになるのは七才頃からであって、十四才頃に一応完成されるのである。

四

感覚的認識が成立するには感覚に知性が協力すること、そして心像は感覚からも知性からも生ずることが述べられた。ところでこの感覚と知性との関係については色々問題となるであろう。感覚と知性とはそれぞれ独立のもので二元的のものであるのか、それとも知性的なものはつまりは感覚的なものに基づき、それを離れてはその活動もないものであろうか、つまりその意味に於いて感覚主義もしくは経験主義なのであろうか、或は逆に知性を離れては何もなく感覚も能動的であり、合理的な判断なのであろうか、それとも一見感覚と知性とは独立的であるが実は同一なるものの二つの働きなのか、従って二元的に見えてその実一元的なものなのであろうか。

観念の或ものは人工によらずに自然に生じて来るし、或ものは教えや配慮によって後得的に生ずる。自然に生ずる観念はプロレープシスといわれ、道徳的な観念や善悪美醜の観念の如きがそれであり、また神の存在とか、神が一切のものを凌駕しているとかいう観念もそうである。[28] これらは空白な、白紙の中に年頃になれば自然に現出するというわけである。後得的な記入は感覚による心像がもとであろうが、人に教わったり、配慮によっても得られるもので、かくして得られた

ものは観念といわれる。観念というのは一種の心像である。この二つのことは資料では屢々出て来るところであって、これは一応そのまま認めるより外ない。

ところでわれわれは「総ての思想は感覚から生ずる、もしくは感覚を離れては生じない」[29]という箇所に出逢うのである。これによれば感覚主義もしくは経験主義とならざるを得ない。つまり知性によって得たと思われる観念や思想もその実、感覚に基づく心像や観念が色々な結合変化を経て生じたということになる。例えば夢の中の心像も、狂人の心像も、感覚を通してわれわれに知られたものを離れてあるのではない。ストアによれば観念の中或もの「出逢い」によって得られる。また或ものは「類似」により、或ものは「類比」により、或ものは「置き換え」によって生ずるし、また或ものは「綜合」により、或ものは「反対」によって、そしてまた或ものは「欠如」によって得られるのである。[30]第一の出逢いというのは接触によるもので、感覚的な心像であり、感覚的な観念である。第二の類似は眼前にあるものから得られる観念で、例えば胸像を見てその似てるところからしてソークラテースの観念を得る如きである。第三の類比によるものは、或は拡大し、或は縮少して得られる観念であって、例えばティテュオスやキュクロープスの如きは拡大して、また一寸法師の如きは縮少して得られたものであるし、また地球の中心の如きは小さい球の中心からアナロギーによって考えられたに過ぎない。第四の置き換えによる観念は、例えば胸に眼のある動物の如きである。第五の綜合によるものは例えば人魚や天馬の如きものであり、第六の反対によるものは例えば生に対する死の観念の如きである。またキュクロープスの一つ眼は眼の欠如である。[31]かくて結局もとは感覚であって、そこから得られた観念が上述の仕方で新たな観念に形成され、更に複合組織されて思想がつくられる。従って感覚的心像なければ諸々の観念や思想はあり得ないというわけである。かく考えれば総ての思想は感覚から生ずるか、もしくは感覚を離れて生ずるのでないということが本当のようである。またキケロもストアの説として善の観念を経験から成立するものと見ている。彼によれば事物の観念は認知か結合か類似か理性の比較かによって生ずるのである。ところで彼は善を本性上絶対的なものと見ながら、今の四つの中の最後であ

る理性の比較によって得られるというのである。[32] 以上のような考えからすればストアは正に感覚主義であり、経験主義であるということが出来るであろう。しかし分析、綜合の能力、承認の能力等の知性そのものは感覚から来たということは出来ない。知性は感覚の息子ではない。感覚に対して知性は独立なるものとして感覚とは異なる能力を持っている。感覚が受動的であるのに対しては能動的なものとして、感覚に協力し、感覚的認識を成立させるのである。そればかりでなく独自の観念を産み、独自の観念を生得的に持っているのではないかとさえいえるのである、かくの如き点に注意すれば、知性は感覚に対しては寧ろ兄弟で、しかも兄の位置にあるが如くである。そしてその能動面を強調する時は、感覚的なものも一種の能動となり、弟の領分迄が兄のものと僭越されることにもなる。しかしそのような合理主義は行き過ぎであり、ストア認識論の誤解であろう。そして知性の生得的なプロレープシスさえもが、もしそれが生得なるが故にアープリオーリであり、普遍性必然性を持ったものと考えられるならば、一見尤もらしく見えて実は行き過ぎなのではなかろうか。プロレープシスというのは kata-lēpsis に対する pro-lēpsis である。前者が客体に即してあるがままに把握する所謂認識であるのに対して、後者は客体によらずに前以って把握する所謂予料であり、先取観念である。それは七才頃から始って十四才頃一応完成するといわれるロゴスの中に、自然に生ずる観念であって、生得的といえば生得的に違ないがそれで以って完成しているわけではない。つまり彼らのいう生得的ということは生れながら持っているとか、アープリオーリとかいうのではないようである。前に一応それらしく解したのであるが、生得的と訳したのは、エンプュトスや自然的な観念の自然的をなのである。エピクテートスも「後得」(epithetos)に対して「自然的」(physikos)という語を用いていた。[33] しかし自然的というのはわれわれの配慮とか教えるとかいう人工や技術に対する語であって、感覚を拒否するものではないらしい。総て観念はもと感覚に基づいてるわけであるが、その一方のものは人から教えられたり、色々配慮して生ずるものであり、他方のものは教わらずとも自然に生ずるというのである。次の「観念の或ものは上述の仕方で、自然的に人工を加えずに生ずるが、或ものはわれわれの教えることや配慮によって生ずるのである。そして後者のみが観念といわ

れ、前者はプロレープシスと呼ばれる」[34]という箇所はこれを示していると思う。つまり「上述の仕方で」ということは白紙である心に、感覚によって記憶や経験がつまれてということであり、かくて自然にプロレープシスが生じて来るというわけである。しかし自然的に生ずるといっても、生ずるには生じ得るだけの素質がなければならぬ。素質を問えばストアの自然学に移らねばならぬであろう。ストアのウシアはロゴスに貫かれた質料であり、その限定として人間もあるわけで、既に種子的ロゴスとして後に発展すべき素質を所有していたということが出来る。自然学からいえば総ての動物は第一番に「自己保存」(to tērein heauto) のホルメーを持ち、自己に親しみ、自己に疎くならぬように出来ているのである。[35]それで総ての動物にとって一番親しいものは、自分の構成とそれについての意識とである。かくて自己を意識し、何でも自己に関係づけて考える。従って自然に、ものを価値的に考えるようになり、自己に有益なものは自然これを善と考えてこれを追い、その反対のものは悪として避けることになる。けだし自己に適合したものを受ければ副産物として快を感ずるし、その反対の場合には不快を感ずるからである。かくしてわれわれにはおのずから共通観念が生ずる。「善とは有益であり、有益以外のものではない」[36]といわれる所以である。徳も有益なものとして求められる。このような素質は人間に与えられてるもので、その能力は七才頃始って十四才頃完成する。その頃になればプロレープシスで充される。つまりロゴスは子供の時にもあったわけであるが、七才頃から発達して、他から教えられなくとも感覚的な認識や経験をつんでいる間に、自然に形成されて来る。それは観念といえば共通観念であり、先取観念であるが、アープリオーリでも確実性を持つものでもない。それは有益なものが善であるといったような観念であるから、何が善であるかは個々に当らねばならないし、また正確なことは更に経験や知性の分析発展によって組織されねばならない。例えばエピクテートスがいうように善は有益で求むべきものであり、悪は避くべきものであるけれども、何人も避けることの出来ない必然的なもの、例えば死のようなものは悪でないということは、[37]経験をつみ、知性の分析発展を経ての dierthrōmenē プロレープシスであって、単なるプロレープシスではない。自然的なプロレープシスはアープリオーリとして普遍性と必然性を要求し得るもの

ではない。かく考えればストアのプロレープシスは、エンプュトスとか自然的といった誘惑的な言葉にも拘らず、別に先験的という意味ではない。かくて総ての思想は感覚から生じ、或は感覚を離れて生ずるのでないという箇所は厳然として支持されるであろう。しかしながらこの故に知性の能力を無視することは出来ない。知性は感覚的認識に協力してそれを成立せしめ、もと感覚から発した心像よりして諸々の観念を形成せしめるのみならず、魂の中の自然的に形成されるプロレープシスを発展せしめて、経験に適用させることも出来るのである。しかし真理の基準ということになれば、それはどこ迄も感覚主義的なものになるであろう。ストアでは存在するものはどこ迄も個々の物体であり、一般観念の如きは外部に相対するもののない単なる名目に過ぎない。だから心像でも真なる心像は、存在を、しかもあるが通りにつかんだ場合の、カタレープシス的なものでなければならない。ストア程客体を重んじたものは、それ以前にはなかった。ストアの真理概念は模写説である。――従ってその弱点もそのままあてはまることとなる。――他の観念はその対応するものが外部にないので、それだけ真を遠ざかるということにならねばならぬ。従って認識論の立場からはストアはどこ迄もノミナリズムである。

ストアでは総て思想は感覚、或は感覚をもとにしてつくられるのであった。しかしその故に知性そのものが感覚から生じたというのでもなかった。かくて感覚と知性とは相対立し、相反するものと考えられる。そしてその故に二元的になる。しかしストアでは感覚と知性とは全く異なるものではない。彼らによれば、感覚と雖もヘーゲモニコンを離れてはあることは出来ない。感覚がヘーゲモニコンからのプネウマによって成立することは前に述べた通りである。ディアノイアとして働くヘーゲモニコンも、感覚として働くヘーゲモニコンも実は同一のヘーゲモニコンであって、別物ではないのである。前にクリューシッポスがパンタシアを魂の中の変化といったのもこの意味に於いてであろう。更にセクストス・エンペリクスによればディアノイアも感覚も同一であり。恰も同じ壺が内から見るか外から見るかによって、凹にも凸にも見られ、また同じ道が登る人降りる人によって、或は登り道とも降り道とも見られるように、「同一の能力が或はヌース

であり、或は感覚である」ということになる㊳。これはクリュシッポスのモニズム的な考えからして当然のことであって、同じウシアがクシスやプシュケーや理性的なものとして現れるのと同じである。

① しかしストアは時間と空虚と場所と意味とを非物体的なものと考えていたから、これは例外である。
② Donald R. Dudley. A History of Cynicism 1937.
③ ゼーノーンは最初犬儒のクラテースについたが、クラテースの師であるディオゲネース自身、プラトーンがイデアについて話し、机そのもの、茶椀そのものという言葉を用いた時、「私は机や茶椀は見るが机そのものや茶椀そのものはどこにも見てない」（D. L. VI 53）といったといわれる。
④ Sext. E. Adv. Math. VII. 248　⑤ Cicero, Academica II 145　⑥ SVF（＝stoicorum Veterum Fragmenta）II 56
⑦ SVF II 55, 56　⑧ SVF II 56　⑨ SVF II 54　⑩ Bréhier Chrysippe p. 85
⑪ SVF II 83　⑫ SVF II 54　⑬ 255　⑭ SVF II 54
⑮ D. L. VII 51　⑯ SVF II 65　⑰ SVF II 70　⑱ SVF II 66
⑲ D. L. VII 52　⑳ SVF II 72, 74　㉑ SVF II 73　㉒ SVF II 68
㉓ Sext. E. Pyrr. I 119, 120　㉔ SVF III 306, 459　㉕ SVF II 83　㉖ ibid.
㉗ D. L.VII 54　㉘ Cicero, Nat. Deo. II 12, 45　㉙ SVF II 88　㉚ D. L. VII 52
㉛ ibid.　㉜ Cicero, De fin. III 33, 34　㉝ Diss. IV 8, 20　㉞ SVF II 83
㉟ D. L. VII 85　㊱ SVF III 75　㊲ Diss. IV 1, 44. I 27, 7　㊳ SVF II 849